

琉球大学学術リポジトリ

ダウン症児に対するオノマトペを利用した補助言語の開発

メタデータ	言語: 出版者: 神園幸郎 公開日: 2009-03-04 キーワード (Ja): ダウン症, 言語治療, コミュニケーション, オノマトペ, 言語発達 キーワード (En): Down's syndrome, speech therapy, communication, onomatopoeia, language development 作成者: 神園, 幸郎, 賤部, 盛久, Kamizono, Sachiro, Takarabe, Morihisa メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9047

ダウン症児に対するオノマトペ を利用した補助言語の開発

(課題番号 01510071)

平成3年度科学研究費補助金(一般研究(C))

研究成果報告書

平成4年3月

研究代表者 神園幸郎

(琉球大学教育学部)

377.7
KA
1991

はしがき

本報告書は平成元年度から平成3年度の3年間にわたり「ダウン症児に対するオノマトペを利用した補助言語の開発」を課題とし、文部省科学研究費補助金（一般研究（c））の助成を得て実施された研究の成果をまとめたものである。

本研究の研究組織は次の通りである。

研究代表者 : 神園幸郎（琉球大学教育学部 助教授）
研究分担者 : 財部盛久（琉球大学教育学部 助教授）
研究協力者 : 嘉数朝子（琉球大学教育学部 助教授）

研究の全体総括には神園があたった。また、本報告書の作成も神園の責任において行ったものである。

本研究に交付された研究経費は次のとおりである。

平成元年度	700（千円）
平成2年度	700（千円）
平成3年度	400（千円）

計 1,800（千円）

目 次

序	1
<研究1> ダウン症児におけるオノマトペの発生機序	5
<研究2> ダウン症児におけるオノマトペの音韻と意味理解の関係	21
<研究3> 自閉症児に対するオノマトペを媒介とした コミュニケーション手段の開発	36
<研究4> 健常児の1歳から2歳におけるオノマトペの発達	48

研 究 成 果 報 告

序

ダウン症児（以下、DS児と略す）は、様々な能力領域において発達障害を示す。当然のことながら知的な発達にも遅れが存在し、その結果として言語発達も遅滞する。Benda (1969)によると、DS児らの話ことばは、普通、始歩より1ないし2年遅れて出現し、歩く前にはなし始めることは希であるとされている。始語が出現する時期は12ヶ月から6歳頃までに幅広くばらつき、平均が約30ヶ月頃であるといわれている。また、始語の出現時期は、DS児の精神年齢（以下、MAと略す）で期待される時期よりもかなり遅れて出現することが指摘されている。DS児はこうした始語の遅れや語彙獲得の遅れを示すのに加えて二語発話の獲得も遅いため、乏しい語彙に基づく一語発話の時期が長く続くことになる。さらに、こうした言語発達遅滞に伴う音声言語の理解と産出の遅れに加えて、DS児に特有なしわがれ声やがらがら声さらにピッチの低い音声（Benda, 1969; Penrose, 1966）といった、いわゆる「ダウン症ボイス」は発話明瞭度を低下させDS児の言語障害を一層深刻なものにしている。このように、DS児の言語発達の遅れは他の精神遅滞児に比べてその遅れは重篤であるといわれている。

一般に、初語の出現時期はPiagetの発達理論におけ感覚運動的知能が充実しはじめる頃と重なるため、従来から初期の言語発達にとって感覚運動的知能、とりわけ感覚運動期の第5段階（12-18カ月）前後の発達との関係が注目されてきた。

こうした観点からMahoney (1981) はBeyley精神発達尺度による発達年齢で統制された健常児とDS症児に対して、Uzgilis-Hunt尺度で測定された感覚運動的知能と受容—表出言語尺度（The Receptive and Expressive Emergent Language; Bzoch & League, 1970）で査定された言語発達の関係を検討した。その結果、DS児の感覚運動的知能は同じ発達年齢の健常児と概して等しい水準に達しているが、受容と表出の両面ともに言語発達はその感覚運動的知能の発達水準から期待される水準までには到達していないことを指摘した。また、DS児ではUzgilis-Hunt尺度におけるVocal-Imitation（音声模倣）の成績が健常児に比べて低かったことから、DS児の言語の遅れは一般的な感覚運動的機能ではなく音声模倣の技能と関係している可能性が考えられるとしている。

長崎・池田（1982）はMA1歳台のDS症児の前言語的活動を分析し、DS症児の言語発達の遅れは、音声言語による発話に至る過程としての前言語的活動において既に遅れがみられると指摘している。さらに、彼らによれば、DS症児の前言語的行為のうち象徴機能と伝達手段の社会的使用に係わる行為に障害があると述べている。

このようにDS症児の認知機能の特異性や劣弱性が言語発達の遅れの背景に存在すると指摘した研究に加えて、DS児の言語発達遅滞の要因として彼らの聴覚-音声系の機能障害を指摘している研究もある。

Dodd（1975）は語音の模唱実験において、DS児群は非DS児群に比べて再認課題では成績がよいが遅延課題で成績が劣ることから、DS児は構音動作を予備的にプログラムして、それを再想起して実行することに困難があると解釈した。さらに、Sommers & Starkey（1977）やZekulin et al.（1974）もDS症児の言語獲得の遅れの原因として聴覚-音声系の機能障害を想定している。

一般に、DS児の言語発達遅滞の原因として上述した認知発達の歪み遅れや特異性と聴覚-音声系の機能障害を指摘する研究が多いようである。したがって、DS児の言語発達を促す指導の方法もおのずからそうした領域の指導が中心になってくる。

DS児の言語発達上の大きな壁は、二語発話の獲得であるといわれている。そこで、二語発話の獲得に向けた言語治療アプローチが従来、試みられてきた。二語発話の発話促進を企図した言語治療アプローチは、大別して二通りの試みに分けられる。その一つは、口頭模倣によって発話能力を促進する方法であり（例えば、Jeffrey, Wheldall, & Mittler, 1973）いま一つは非音声的な言語刺激（例えば、サイン）を使用、もしくは、併用することによって口頭発話能力を促進させようとする方法である（例えば、Kotkin, Simpson, & Desanto, 1978）。

両方法ともに、それなりの効果を上げてはいるものの、前者は二語発話の訓練が持続されないと二語構造の発話は減少し、二語発話の定着性に問題を残している。この点については、西村ら（1984）は、二語発話の文構造の形成に必要な認知能力の訓練がなされていないことによるのではないかと指摘している。また、後者では、言語訓練にサインを導入するという発想は、DS児の聴覚-

音声系における特殊な欠陥に対する配慮からきていると思われる（西村，1984）が，前掲の指摘に加えて，はなしことばだけでなく，新たな記号としてのサインの習得を必要とするため，子どもにとって負担が大きく，したがって訓練期間が長期に及ぶ（一説によると2年から6年）といった問題がある。両方法ともにコミュニケーションを重視する視点は評価に値するが，不自然さは否めない。

筆者は，これまでの研究から，言語発達遅滞児の中でも，とりわけダウン症児は，いわゆる擬音語や擬態語（onomatopoeia, オノマトペ）を伴った言語情報を用いることによって交信機能を高めることができるとの印象を得ている。すなわち

ダウン症児に話しかける時，成人語で話しかけるよりも幼児語とりわけ擬音語や擬態語で関わりと反応性が高く，なおかつ意思の交換が円滑に行われコミュニケーションが拡大する。また，ダウン症児間の交流場面でもオノマトペやオノマトペ様音声による関わりが頻繁に観察される。こうしたことは，ダウン症児がオノマトペをコミュニケーション手段として積極的に利用している可能性を伺わせる。

ところで，語は音と意味が結合したものであるが，両者の関係は悉意的で本来自然に結び付いたものではない。音と意味の自然的な関係がみられる場合，つまり音そのものが意味を表象することを一般に音象徴（sound symbolism）と呼んでいる。オノマトペはまさにこの音象徴語に他ならない。したがって，意味や概念の抽象化能力に乏しいダウン症児にとって音から直接意味を喚起できるオノマトペは彼らの言語能力の劣性を補う有効な手段となっている可能性が高い。また，オノマトペに特有な音韻構成による韻律的特徴も構音機能の劣弱性を示すダウン症児のオノマトペ使用を促進させているとも考えることができる。「オノマトペは具体的，かつ感覚的である。強い力があって読む者を「場面」へ，「現場」へ，引き摺り込む。」（井上ひさし，自家製 文章読本）そして，相手の感情に作用し，一気に問題の核心に迫らせるといった特徴もある。このように，オノマトペはコミュニケーション場面における話し手と受け手の情緒的な一体感を醸成する機能を持っているのかもしれない。ダウン症児のオノマトペ使用の背景には先に指摘したオノマトペの音象徴性や韻律特徴に加え

て、コミュニケーション場面におけるオノマトペ独自の語用論的機能も存在しているのかもしれない。

適性処遇交互作用の観点から、ダウン症児に対して、オノマトペに、身振りや行為といった非言語的情報伝達手段を随伴させることによって、より高次な交信手段の形成が可能になるとすれば、彼らの情報獲得量は飛躍的に増大し、その後の行動や学習に対して二次的効果が期待される公算が強い。さらに、高次な言語運用段階への移行が円滑化される可能性も高い。なおかつ、こうした交信手段は先に指摘したDS児に対する言語治療アプローチに比べて、適性処遇交互作用の観点に立った、より自然で無理のない言語治療の方策をもたらす可能性がある。

本研究はダウン症児に対するオノマトペを使用した新たな補助言語の開発の可能性を探るものである。

目 的

本研究はそれぞれの目的ごとに以下に示す4つの研究から構成されている。

目的1 ダウン症児のオノマトペを調査し、それらがコミュニケーションにはたす役割を明らかにする。

研究1： ダウン症児におけるオノマトペの発生機序

目的2 目的1の結果に基づいてオノマトペを用いた新たなコミュニケーション手段を開発する。

研究2： ダウン症児におけるオノマトペの音韻と意味の関係

研究3： 自閉症児に対するオノマトペを媒介としたコミュニケーション手段の開発

研究4： 健常児の1歳から2歳におけるオノマトペの発達